

# 『ビブリオテーク・ブリタニク』誌とピエール・プレヴォ

## —効用原理と道徳哲学—

中宮 光隆

はじめに

I 『ビブリオテーク・ブリタニク』誌の概要

II 『ビブリオテーク・ブリタニク』誌の特性

III ピエール・プレヴォによるマーセット『経済学問答』への評注

おわりに

### はじめに

私は前稿までにピエール・プレヴォについて、彼のバイオグラフィーと業績の一端を検討した。その目的のひとつは、シスモンディ経済思想との関係を明らかにして両者の思想の特徴をより明確にすることであった。ピエール・プレヴォの思想がシスモンディの思想形成に大きな影響を与えたと考えられるからである。しかし両者の思想関係は、単に両者間においてのみ見られるのではない。2人を包み込む形で、『ビブリオテーク・ブリタニク』誌と、その後継誌である『ビブリオテーク・ユニヴェルセル』誌がある。プレヴォとシスモンディはいずれも両誌に執筆しているが、とくに前者はこの定期刊行物の編集者たち

の有力な協力者だった。そしてピエール・プレヴォと編集者たちの主要な思想的基盤のひとつは、効用原理だと言われる。本稿はこの点を確認することによって、プレヴォとシスモンディの思想継承関係におけるひとつの柱を探ることが目的である。

また前稿で扱ったピエール・プレヴォの著作等は主として1800年代初頭までに執筆・発表されたものであった。本稿では『ビブリオテーク・ユニヴェルセル』誌に寄せられた1816年の抜粋記事とその中でピエール・プレヴォが付した注釈を検討する。ここにはそれ以前に見られなかった、彼の言う道徳哲学にたいする懐疑的な視点と現状批判が反映されていると読めるのであるが、そうだとすれば、これはシスモンディの『経済学新原理』、すなわち「スミス理論の修正」にもつながる論理であり、その意味でも興味深い記事であるとともに、シスモンディ経済理論を理解する上で有益な示唆が得られる記事であるともいえる。

このような問題意識のもとで、以下、『ビブリオテーク・ブリタニク』誌等の基軸的・基盤的思想を解明するが、もとより本稿はその一端を限定的に扱うにとどまらざるを得ない。

## I 『ビブリオテーク・ブリタニク』誌の概要

『ビブリオテーク・ブリタニク』(*Bibliothèque britannique*)誌は、マーク＝オーギュスト・ピクテ (Marc-Auguste Pictet, 1752-1825) がアルプス地方の地質調査からジュネーヴに戻った翌年の1796年に、弟のシャルル・ピクテ (ド・ロシュモン) (Charles Pictet de Rochmont, 1755-1824) と友人のフレデリック＝ギヨーム・モーリス (Frédéric-Guillaume Maurice, 1750-1826) に呼びかけて刊行されたものである<sup>1)</sup>。その背景としてピッカートン (Bickerton, David) は、18世紀になって書籍の出版と取得がいわば普遍化した点を挙げている。すなわち、16、

17世紀揺籃期における書籍は、大聖堂に寄贈されたり特別なファンドによって購入され鍵のかかる書棚に秘蔵されていたのに対して、18世紀になると出版事情が変化して安価で小型で持ち運び可能な書籍の出版が、世俗的な知識を得るためばかりでなく娯楽目的の需要によって活気づけられた。そして、教育を受けた大衆がより広範に増大するにつれて、百科事典の出版が検討されるのも当然といった状況になった。新しい読者層は、知識と視点、とりわけそれらを獲得するための定期刊行物の出版を広めるキー・プレーヤーになったというのである<sup>2)</sup>。その際、定期刊行物は、より安価での印刷と出版社の増加によって「改良されたコミュニケーション」手段、すなわち図書というメディアの普及の副産物だったとされる<sup>3)</sup>。というのは、定期刊行物は出版物の宣伝や抜粋や翻訳といったいわば二次的な内容にとどまっていた、多くの出版者たちは、雑誌を作成するにあたって百科事典のような特性を要求し、特定の分野におけるすべての出版物を網羅することを求めたからである。『ビブリオテーク・ブリタニク』誌が主として諸科学の先進国であったイギリスで出版された書籍の翻訳と抜粋を掲載したのは、このような状況の下で企画・刊行された定期刊行物としていわば当然の編集内容であったというべきであろう。もっとも、同誌がイギリスを重視したのは、諸科学の先進国という点だけではない。ジュネーヴとイギリスは、人々の往来も含めて文化の交流が盛んだったからである<sup>4)</sup>。

『ビブリオテーク・ブリタニク』誌は、単一のタイトルのもとに3つのシリーズに分けて発行された。*Littérature*（年3巻、1,650ページ）、*Sciences et Arts*（年3巻、1,200ページ）それに *Agriculture*（年1巻、550ページ）であり、全体で年間3,400ページにもおよぶ大部な刊行物であった。この3シリーズへの分割については、創刊号（1796年）巻頭に収められた編集者（おそらく M.-A. Pictet）によると思われる序文で、その意図が述べられている。それに依れば、（後述のように）編集者たちはこの雑誌に多くの分野を網羅したいとの希望を持ってはいたものの、それは事実上不可能なので、いくつかの分野を組み合わせること

にしたのであった。その組み合わせから、*Sciences et Arts* に自然科学関係の翻訳・抜粋・論文等が、*Littérature* に人文、社会関係のそれらが収められている。この2シリーズで科学の3分野が網羅されていることになるが、それに加えて *Agriculture* が1シリーズ別に設けられたのは、イギリスから農業技術を積極的に取り込もうとした編集者たちの意図が窺える。Bickerton (1986) の整理によれば、*Littérature* に掲載された記事をページ数で計算し比較すると、大別して道徳・哲学等の「思想」に分類できるものが同シリーズ全体のうち12%、法学・経済学・教育等の「社会科学」に分類できるものが17%、歴史・伝記等「歴史」が17%、旅行記が25%、文学・戯曲等の「文学」26%、「その他」が2%となっている。「社会科学」のなかでは経済学関係が最多で「社会科学」の47%を占めているという。*Sciences et Arts* のシリーズでは、「物理学」関係記事のページ数が同シリーズ全体の29%、「化学」が13%、「自然史」が18%、「医学」が24%、「技術」が8%、「その他」が7%となっている。これを見る限り、取り上げられているテーマは科学の諸分野を網羅していると言えそうである。

『ビブリオテーク・ブリタニク』誌は1796年から1815年まで刊行され、1816年以降は『ビブリオテーク・ユニヴェルセル』(*Bibliothèque universelle des sciences, belles-lettres et arts*) 誌に引き継がれた。18世紀中葉から19世紀前半にいたる期間、ジュネーヴは政治・経済・社会の分野で大きな変動を繰り返した。数度の内紛や外国からの侵略の脅威にさらされた後、1794年の武装蜂起では、600人以上が投獄され有力者が処刑されたという<sup>5)</sup>。他方、1796年に始まるナポレオンのイタリア遠征は、ジュネーヴをも次第に危機に陥れていった。1798年4月、ジュネーヴはフランスに占領され、併合された。ピッカートンは、これは「しばしば見落とされがちな、大規模な国際的反発を呼んだ。スイスに対抗する動きがイギリスで『非常に深く広範囲な民意の動き』を惹起し、イギリスの戦争支持派にフランス共和国を自由の敵と考える決定的な論拠を提供し、急進的な信奉者にすら総裁政府は革命を裏切ったということを確認させた」<sup>6)</sup>と述べて



いる。しかし、1813年12月、フランスによるジュネーヴ占領は終了しジュネーヴ共和国が成立する。1814年のウィーン会議で独立が承認されたジュネーヴは、翌年、スイス同盟に加盟する。「1796年ジュネーヴにおける『ビブリオテーク・ブリタニク』誌の創刊はそれ自体、イギリスとジュネーヴの強力な絆の象徴であり、この雑誌がフランス統治の時期を通じて存在し続けたことは、ジュネーヴ自身とイギリスの共通の敵によって定められた運命に屈服することをジュネーヴが拒否したということを示している」<sup>7)</sup> たのであるが、もはやその役目を果たす必要はなくなった。ピッカートンが指摘するように、「フランス帝国の崩壊とともに、『ビブリオテーク・ブリタニク』誌は『ビブリオテーク・ユニヴェルセル』誌に転換した。これにはまた、象徴的な意味がある。復興期におけるジュネーヴ人のコスモポリタンな性格に、イギリス心酔者が外国の影響に対してよりバランスのとれた全対応、この都市が今日まで保持し続けた対応方法を執るという変化が生じたのだらう」<sup>8)</sup>。誌名の変更は、当時の社会・政治状況の変化だけでなく、おそらくそのなかから獲得された編集者たちのこの国と同胞の目指すべき姿を示しているとみるべきであろう。

前述のように編集者は、ピクテ兄弟とモーリスである。さらに『ビブリオテーク・ブリタニク』誌には多くの協力者たち (collaborators) がいた<sup>9)</sup>。それらの人々をピッカートンの分類にしたがって列挙すれば、以下のようになる<sup>10)</sup>。

正規の、報酬が支払われる協力者

Louis Odier (*Sciences et Arts* シリーズで、1796年以降)

Pierre Prévost (*Littérature* シリーズで、主として1803年以降)

Charles-Gaspard de la Rive

(*Sciences et Arts* シリーズで、主として1809年以降)

非正規で、報酬が支払われる協力者

Pictet 家の人々

非正規で、報酬が支払われた証拠がない協力者

C.-V. de Bonstetten (1 Litt)	J.-P. Maunoir (3 So&A)
A.-P. Candolle (2 So&A)	Abbé Morellet (1 Litt)
Jean de Carro (1 Litt)	J. Peschier (1 So&A)
J.-J. de Roches (1 So&A)	Pierre Picot (1 So&A)
Etienne Dumont (6 Litt)	Prof. Secretan (1 Litt)
Simon L'Huillier (1 So&A)	Jean Senebier (1 Litt)
J. Massieu (1 Litt)	J.-P.-E. Vaucher (1 So&A)

(括弧内の数字は各協力者が関与したことが確実な編数。)

(*Litt* は *Littérature* シリーズ、*So&A* は *Sciences et Arts* シリーズを表す。)

ここでとくに注目したいのは、ピエール・プレヴォである。ルイ・オディエやシャルル＝ガスパール・ド・ラ・リーヴとともに正規に報酬が支払われる協力者になっている。しかもプレヴォは、同誌の *Littérature* シリーズで、となっている。まだ若年のころから宗教、哲学、法学を学んだプレヴォは、青年期に物理学等の自然科学を学び、またその分野で多くの著述を残しているが、18世紀末頃からは社会科学、とくに経済学関係の著作も多くなっている。前稿でも指摘したように<sup>11)</sup> プレヴォは「ジュネーヴにおける経済学の最初の教師だった」のであるが、それはジュネーヴ・アカデミーの教壇とともに、『ビブリオテーク・ブリタニク』誌を舞台になされたと言うべきであろう。その後もプレヴォは自然科学分野の著作を発表し続けたし、後継の『ビブリオテーク・ユニヴェルセル』誌にも自然・社会科学の両分野で書き続けた。また協力者のなかで、Etienne Dumont も *Littérature* で6編にかかわっているとされる点も注目される。

## II 『ビブリオテーク・ブリタニク』誌の特性

『ビブリオテーク・ブリタニク』誌の特徴をふたつの面から検討したい。ひとつはこの定期刊行物がある読者や当時の社会にどのような影響を及ぼしたかであり、他のひとつはこの定期刊行物はいかなる思想的基盤のもとに編集されたかである。とはいえ、抜粋や翻訳が主体の本誌について、その思想を明確にすることには困難が伴う。そこでこの点に関して本稿では、編集者が執筆したと思われる序文や、後述のように翻訳者や抜粋者によって挿入された注を手がかりに考察する。

まず前者についてである。ピッカートンは一般に雑誌が持つ役割として「コレクション」、「要約雑誌」それに「レビュー雑誌」の3点を挙げている。ここで「コレクションは、主として、忘れ去られてしまって他ではなくなってしまった古い文学をリプリントしたものを集めた」ものであり、「要約雑誌は、単に、初めは定期刊行物で刊行された論文からの抜粋やダイジェストを作成することに興味があるだけ」のもの、「レビュー雑誌は、当該テーマの文献全体をサーベイする」ことに充てられたものとされている<sup>12)</sup>。そのうえでピッカートンは、『ビブリオテーク・ブリタニク』誌は、翻訳雑誌としては言葉の通常の意味でレビューをするだけの能力を自負することはできなかつたにもかかわらず、確かにこれら三つの機能を結合していただろう。レビューが刊行されたときは、一般にレビューの翻訳があるのであって、通常、『ビブリオテーク・ブリタニク』誌の編集者たちの著作ではなかつた。そうであっても、理想的な状況の下でこのレビューの機能は、他国の文学や科学の出版物になじみのない大衆のなかで、読まれるべき著作の選択を彼らに可能にさせるという、大陸の読者にとってとくに価値あるものになり得たのであつた。しかしながらこのことは4つの状況を前提している。(a)編集者たちがレビューのための著作について賢明な判断をするのに良い立場にいること、(b)彼らが選択した著作のレビューへ

のアクセス権を持っていること、(c)これらのレビューの翻訳が広く知られたり読まれたり（原文でも翻訳でも）される前に出ること、(d)読者が希望すればレビューされた著作が（原文でも翻訳でも）容易に入手できること」を列挙したうえで、続けて「イギリスと衰退した大陸との間の接触（手段）として、これらの理想的な諸条件がいつまでも広くあるという見込みがなくなってきたことが編集者たちに次第に明らかになってきた。間もなくレビューすることは無意味な営為であると認識されるようになってうち捨てられ、対照的に『ビブリオテーク・ブリタニク』誌の要約雑誌としての、また翻訳の収集としての機能が拡大されるようになった」<sup>13)</sup>と指摘している。

確かに同誌は翻訳やその抜粋記事が多い。しかし次節で瞥見するように、翻訳や抜粋に付した翻訳者（筆者）の注に注目されるべきものがあるし、もとよりオリジナルの著作の選択そのものに、編集者、協力者、寄稿者たちの意図があるはずである。それだけではなく、ピッカートンも指摘するように、同誌は次第に「派生的な役割」を脱却して「はっきりと内容のある特徴」を発展させたのであった。その傾向は後継誌の『ビブリオテーク・ユニヴェルセル』誌でさらに強化されているように思われる。

本誌を特徴づけるもうひとつの側面は、編集や協力者たちの思想的基盤である。それは一言で言えば、「効用」と「道徳」である。「効用」は「効用原理」あるいは「功利主義」に置き換えても良いだろう。『ビブリオテーク・ブリタニク』誌第1巻第1号（1796年）序文には「効用原理（Le principe d'UTILITÉ）、これはわれわれの不変の羅針盤である」との表現に続いて以下の叙述がある。

「この原理はそもそも、すべての科学を同一線上に置くことを許さない。農業はわれわれの目から見ると第1線を占めている。また農業はわれわれにとって、第1の技術である。さらにそれは、とりわけ諸原理を広めることを思考する科学である。それは、イギリスやスコットランドのモラリストたちの諸著作において、貴重な教訓を秘めているものである。個人はこ

これらの哲学者以上に、正義の本能を発展させ開発し、人間の心の内に秘められたあらゆる気力が目指す、幸福の熱い全面的な期待を導いている。この著者たちの道徳は明解で純粹である。その特色は穏やかであり魅力的であり、おそらくけって虚偽の哲学の過ちなど無く、彼らの人間性にとりつかれた悪は、もはや逆の毒を必要としないだろう。」<sup>14)</sup>

このように創刊号冒頭の序文で編集者たちは、効用原理を「不変の羅針盤」として彼らの思想基盤を明確にしたうえで、イングランドやスコットランドの「モラリスト」と結びつけつつ、道徳あるいは正義について語っているのである。しかしここで取り上げた創刊号「序文」の叙述ではきわめて抽象的なものにとどまっており、その内容は明確ではない。それがここよりもやや明瞭になるのは、第7巻（1798年）の序文である。ここではあらためて同誌の分類——*Littérature* と *Sciences et Arts* ——の内容を説明している。そのなかの *Littérature* について以下の叙述がある。

「科学や技術も農業も含まない内容全体を取って一言で示すならば、われわれは *LITTÉRATURE* より以上に適当な言葉を見出さなかった。われわれはわれわれが手中にしていた（掲載）内容の取捨選択を規定してきた動機に関して、またわれわれがこのシリーズにおいて、ほかでもないいくつかのテーマを重視した範囲に関して、われわれの読者に説明する義務がある。

1 国の政治体制がどうであれ、すべての人々の歴史はわれわれに、宗教、法、習慣がその安寧と繁栄のもっとも確実な保証であることを証明している。われわれはそれらをまた、諸個人の幸福の主要な源泉として考えている。したがって、われわれがもっとも頻繁に読者諸君に立ち返ってくれるよう求めなければならないのが、社会のこの大きな関心事なのである。」<sup>15)</sup>

この一文をもってしても、必ずしもその思想は明確ではない。しかしここでは、第1に安寧と繁栄のために宗教・法・習慣がもっとも重要な要素であると

している点、第2に「諸個人の幸福」という課題を持ち出している点、第3に「諸個人の幸福」と（社会の）「安寧と繁栄」を結びつけている点に注目しておきたい。

さらにこの序文は次のように主張している。

「精神の変化が全体として改革の方向に向けられる時代においては、市民法は、最も永く使用してきたものでさえ、改めて検討されなければならない。多くの著述家がそれに従事し、またそのまっ最中である。ベンサム氏は、諸思想の賢明さ、深さそれに独創性の点で第一人者であると思われる。ロンドンに居を定めたわれわれの同胞のひとりで、この著者〔ベンサム（一引用者）〕とずっと以前から親しい関係にあった人物——この著者は自分の手稿類をこの人物に委ねたのであるが——は、その抜粋をわれわれに送りたがっていたが、彼は再度われわれにそれを約束した。このコレクションのメリットは、職業上であろうと趣味の上であろうと、これらの重要な内容を熟考するわれわれの読者に、見落とされることはないだろう。」<sup>16)</sup>

ここでもベンサムの何が重要なのか、その内容は明確ではないが、すくなくともベンサムを高く評価し、その著作の抜粋を取り上げる意思のあることが示されている。これに続くパラグラフは、以下のとおりである。

「道徳、すなわち“自分自身と他人を幸福にする技術”は、われわれには二つの観点の下に考察されうるように思われる。現在の世代への適用として、また教育によって次の世代に強い影響を及ぼすことに照らして。

われわれが Gisborne、Ferguson、Dugald Steward、Adam Smith、Aikin の著作からとった抜粋は、生活というやっかいな道の、いかに優れた案内であるかを示しているに違いなかった。

しかし、単純な教訓（戒律）は弱々しく効くにすぎないし、まれに成人たちに作用する。精神を鍛えることによって、いかなる情熱もかきたてないのなら、それは心を素通りするだろう。有効な効果を上げるために、モ

ラリストは、一方では人は教訓（l'exemple）から強力な影響力が生じることにならうこの傾向と、他方ではあらゆる社会的徳を創造し活性化させる、そして名誉などもっていない、この同感を授けられる、そのような道徳本能において作用させることを求めているに違いない。なぜなら、好意、思いやり、慈善を語っても、それは不完全にしか示されていないからである。これら二つの手段によって、現代の世代でさえ、多くのエゴイズムと無気力が打ち破られ、生き生きとして生産的な道徳を回復させてみることができるからである。（…）われわれは偉大な例を示す喜びに、有益な同感をかきたてる喜びに身を委ね、そしてこの喜びは裏切られなかったのであった。賛意と関心という貴重な証拠がわれわれの旅のこの部分を励ましたのであった。」<sup>17)</sup>

まず第1に、この引用の冒頭の一句、「道徳、すなわち“自分自身と他人を幸福にする技術”」にふたつの面で注目したい。ひとつは「自分自身と他人を幸福にする」ことが重要な事柄と捉えているように思われる点である。自分自身だけではないし、他人だけでもない。これは「多数の人々の幸福」と読めないだろうか。他のひとつは、これを「道徳」に置き換えている点である。言い換えれば、18世紀の道徳哲学と（多数の人々の）「幸福」を結びつけているのである。ビッカートンはこの箇所について、「このようにして道徳哲学と社会的効用のギャップが橋渡しされている」<sup>18)</sup>と指摘している点は首肯できる。第2にこの一節で、『ビブリオテーク・ブリタニク』誌の（おそらくこの序文を執筆した）編集者たちが、18世紀イギリス（スコットランド）の道徳哲学を高く評価していると認められる点である。ここで強調されている「教訓（とその影響力）」と「（同感をもたらす）道徳本能」の重要性は、これら道徳哲学者とその著作から得られると考えられているように思われる。ビッカートンも「こうして『ビブリオテーク・ブリタニク』誌は道徳的高潔さと、付随する社会的責務を奨励しようとしたのであろう」<sup>19)</sup>と述べるとともに、「この雑誌は、厳粛な熟考のため

の素材を提供するとともに、流行や珍しさや人気といったもの以前に、真の功績に配慮しているのであろう。要するにこの雑誌は、楽観的な価値基準という状況のなかで人類に役立つことを追求したのだらう。」<sup>20)</sup>と評価している。

道徳哲学と効用原理の結合、その視点からの啓蒙、これが『ビブリオテーク・ブリタニク』誌の特性であり、その背後にはフランスに対抗するジュネーヴの知識人たちによる祖国への熱い思いがあったように思われる。

### Ⅲ ピエール・プレヴォによるマーセッ『経済学問答』への評注

前節で述べた『ビブリオテーク・ブリタニク』誌の特性、すなわち編集者たちの立場は、同誌やその編集者たちへの有力な（と思われる）協力者のひとりであったピエール・プレヴォにも共通すると見るべきであろう。フランスからの独立後のジュネーヴで、上述のように『ビブリオテーク・ブリタニク』誌は、1816年から『ビブリオテーク・ユニヴェルセル』へと誌名が変更された。それにもかからず、編集者たちと協力者であるピエール・プレヴォの基本的視点・見解は、変わっていないと思われる。「基本的」というのは、根底に道徳と効用原理を据えている点に変化は無いものの、社会・経済状況の変化によって論理の力点の置き方に進展が見られるからである。状況の変化の少なくともひとつはジュネーヴの独立であるが、他のひとつは経済状況の変化、ナポレオン戦争終結後のいわゆる「過渡的恐慌」の経験であり、後者が前者以上に大きなインパクトを与えている。

前稿（拙稿、2011）でも述べたように、19世紀初頭のピエール・プレヴォは、『ビブリオテーク・ブリタニク』誌（31巻、1806）に寄せたマルサス『人口論』に関する考察では、マルサスに対する批判的言辞は見られない。むしろそこではマルサスを下敷きにしつつ、それに反した見解をとる（と少なくともプレヴォが理解する）ルソーが批判されている。そのうえでプレヴォは、生産量の

増加を超える人口増加を如何に抑制するかを検討しているのである。これにたいして1816年の『ビブリオテーク・ユニヴェルセル』誌におけるプレヴォは、生産量の増加に懐疑的である。このことを端的に（やや遠回しにはあるが）表しているのが、『ビブリオテーク・ユニヴェルセル』誌第2巻（1816）に掲載された、彼によるマーセット婦人『経済学問答』抜粋とそのなかに付された彼の注釈である。

その注釈を見る前に、それが付された本文自体の論述展開の流れを確認しておこう。この抜粋記事の執筆者名は記されていない。しかし注釈の末尾にピエール・プレヴォのイニシャルが付されているところから、抜粋記事の執筆者がピエール・プレヴォであることはほぼ確実である。この抜粋記事の冒頭で、プレヴォであろう筆者はまず、経済学とはいかなる学問であるかに触れている。この点に関する『経済学問答』の記述にも触れ、またJ. スチュアートの著作のタイトルに「経済学」(*économie politique*) という用語が用いられていることに触れつつ、筆者プレヴォは、J.-B. セーの「経済学は富を研究する科学である」とともに、「経済学は、富が如何に生まれ、広められ、消滅するか、その発展を奨励する理由、あるいは頹廃を引き込む理由、人口への影響、高い身分の能力、人々の幸福と不幸を示す」科学であると指摘し、また『経済学問答』のなかでは「マダム B」が「若い学生」との対話のなかで、この定義に追従している。彼女はいう。「この科学はまさに、富や国家の繁栄を追求することを学ぶこと」と述べている<sup>21)</sup>。

そのうえで筆者プレヴォは、『経済学問答』に登場する「マダム B」はこれに続いて「富の源泉」<sup>22)</sup> を追求し、「所有愛が労働の情熱を鼓舞し、生産物を無限に増大させる」こと、そしてこの「所有は法律によって保障されねばならず、そうすることで安全性が維持される」とともに、「労働が永続的な活力を獲得するための不可欠の条件である」ことを学生に理解させていると指摘している。次に分業の原因と結果について詳しく論じられ、「機械の発明によって促進さ

れた蓄積は、それ自身労働と、生産に必要な手段である資本を生み出す」ことを説明している、と筆者プレヴォは指摘する。続いて筆者プレヴォは、「マダム B」と学生「キャロライン」の対話を引用している。その内容は概略以下のとおりである。「マダム B」が社会の発展とともに繁栄、安全、分業の幸福な諸結果を認め、そしてまた富者と貧者の差別が生まれた、と述べたのに対して、学生「キャロライン」は不平等を引き起こすあらゆる悪は悲しいものだと応える。それに対して「マダム B」は、「私はなぜ差別が悪だといわれるのか解らない」と反論する。すなわち、貧富の差を悪だとする学生に対して、「マダム B」は悪ではないといって、これを肯定するのである。そして富者がいなければ貧者は餓死するし、貧者がいなければ富者は働くことを強制されるから、「富者と貧者はおたがいに必要」だと言う。さらに機械の発明・導入に話がおよび、学生が機械は労働者の雇用機会を失わせ、人々から仕事を奪うと否定的に捉えていることに対して、「マダム B」は、機械の導入が労働を節約し、商品価格の低下をもたらし、その結果需要が増加し、またそれに応じて生産も増加する、そこでこの分野では機械の導入以前よりもかえって雇用される労働者は増加すると指摘する。さらに資本があるかぎり貧者は雇用を見つける。豊かな国では大企業が生まれ、さらに道路や運河の工事、橋や建物の建築等々、「農業や製造業や商業における資本の通常の充当の他に、多くの人々に仕事を与えるすべての分野で労働（需要）が生み出される」ことが付け加えられる。ここにいたって学生「キャロライン」は、「マダム B」の主張に同意する。

しかし興味深いのは、この対話とその結末に対して筆者プレヴォが注で疑問を投げかけている点である。すなわち、

「ここでは諸結果を評価するために、他の科学では何回も成功した方法、極端に仮定をたてるという方法をここで適用されることはできないだろうか？ もしどの分野においても労働は最後には単純化されるとすれば、どうなるのだろうか？ すべてが非常に短時間で、かつ非常に容易に生産さ

れ、需要は全体的に増加し、われわれが注釈を加えているテキストの論理に従うならば、生産物は需要に比例するだろう。そして仕事の単純化がなければ、より多くの労働者が活動することになるだろう。その結果、労働者の食糧、衣服、住居が改善されることになるのだろうか？ —多分。—何ら疑いもなく、富者はあらゆるもので満ち溢れているだろう。この豊かさの中で、貧者の部分が現在よりも遙かに多数存在していたということは、あまり確実ではない。それはちょうど、印刷所の印刷工や綿織物工場の労働者が、手作業の筆耕者や手織り工よりも遙かに良く処遇されているということが証明されていないのと同様である。様々な形態で表現されるこの観察は、富の理論が形成されるとしても、幸福の理論は作れないということを十分に示している。(P. P. p)」<sup>23)</sup>

プレヴォは、たとえ労働者の雇用が増加しても、彼らの生活が向上してはいることからの『経済学問答』の対話を批判しているのである。その視点は、重要なことは人々の幸福が実現されているかどうかであって、単に富が増加すれば良いというものではない、ということである。

## おわりに

『ビブリオテーク・ブリタニク』誌とその後継誌である『ビブリオテーク・ユニヴェルセル』の編集方針、および編集者たちの有力な協力者のひとりであったピエール・プレヴォの1810年代半ばの思想を瞥見した。それらは、一言で言えば道徳哲学と効用原理および両者の結合である。より具体的には、人々の幸福実現の重要性と貧富の差への疑問ないし否定である。『ビブリオテーク・ブリタニク』誌が発行された時期にはフランスによる事実上の占領下であって、イングランドやとりわけスコットランドの思想に共感を抱き、それらを積極的に取り込んだ同誌とその編集者たちは、そこに立脚点を置いた定期行物を発

刊することによって、祖国の人々への啓蒙とその国の発展を期待したように思われる。同誌の協力者や寄稿者たちも、そのような立場に共鳴したに違いない。ピエール・プレヴォやエティエンヌ・デュモンが執筆した記事が少なからず掲載されていることが、その証左であろう。

さらにそのような思想的基盤に立つピエール・プレヴォは、1810年代中葉以降経済の混乱を目の当たりにして、当然のことながらスミスやそれをそのまま取り込む当時の思想家たちの論調に疑問を投げかけている。そこにはピエール・プレヴォ自身の、19世紀初頭の見解とは違ったニュアンスの主張が見られるのであるが、それは彼の視点や立脚点が変更されたのではなく、1810年代の経済社会の変化への対応だったとみるべきである。それは多数の人々の幸福の実現を重視した彼の思想が一貫していたからこそ生じた、当然の結果であった。

シスモンディが「スミスの祖述」を変更する「スミスの部分的修正」の必要を感じ、『経済学新原理』のモチーフを形成しつつあったのは、ちょうどこの時期であった。

## 注

- 1) 『ビブリオテーク・ブリタニク』 (*Bibliothèque britannique*) 誌の編集者が上記の3人であることはよく指摘される。しかし本文で記したように、M.-A. ピクテが他の2人に呼びかけたことについては、David Bickerton, Judith Proud (ed.), *Transmission of Culture in Western Europe, 1750-1850*. 1999. のBickertonによるIntroductionにおける記述 (p.11) による。
- 2) *ibid.*, pp.11-12.
- 3) *ibid.*, p.12. 以下このパラグラフの内容は、同ページの記述による。
- 4) 『ビブリオテーク・ブリタニク』 (*Bibliothèque britannique*) というこの定期刊行物のタイトルと、それが『ビブリオテーク・ユニヴェルセル』 (*Bibliothèque universelle*) に変更されたことが示唆する内容について、ビッカートン (Bickerton) (1986) は

以下のように指摘している。「多くの要素がイギリスとジュネーヴの強い絆を發展させるのに貢献した。諸結果から原因をときほぐすのは容易ではない。対照的に、文化的なイギリスびいきの兆候が認められるのは明白である。早い時期にイギリス—ジュネーヴ関係を研究した W. ヴリーランド (Vreeland) は以下のように言い切っている。『イギリスがジュネーヴを支配したのは18世紀後半である。(…) イギリス人が模倣され、討論クラブ、イギリスの雑誌、イギリスの家具、イギリスの服装を持つことが希望された。(…) サロンはイギリス人の君主や著名な人々のポートレートで飾られている。イギリスの詩やイギリスの小説がいたるところで読まれている。』(W. Vreeland, *Étude sur les rapports littéraires entre Genève et l'Angleterre jusqu'à la publication de la « Nouvelle Héloïse »* (Geneva, 1901), pp.111 and 195.) / このような文化的影響は密接な社会的関係を示している。実際、ロンドンに旅行することが若い貴族の教育法の不可欠な一部分になっていたのと同様に、良家のイギリス人にとって外国旅行の途中でジュネーヴに滞在することは '是非とも必要なこと' になっていた。ジュネーヴはイギリス人によって好意的に評価される特色を多く持っていた。ジュネーヴは健康そうに思われた。そこは南フランスやイタリアに向かう '途中' で訪れることが可能だった。その山々が連なる光景は魅力を増すと思われたし、その高い道徳的教育的水準によってジュネーヴは (パリと比較して)、フランス語の勉強のために安全な場所として推奨された。(…) 逆に人生で成功したいと考えても彼らの祖国の自然的限界に阻まれると感じる、あるいはその都市の政治的亡命の波に加わることを余儀なくされた多くの若いジュネーヴ人が、ビジネス、銀行、医療、軍隊、あるいは外交の仕事に就き、あるいはそうしようとしたのは、まさにイギリスにおいてであった。」(Bickerton, 1986, pp.22-3.)

- 5) 詳細は拙稿「ピエール・プレヴォの生涯と業績」(熊本県立大学総合管理学会『アドミニストレーション』第16巻3・4合併号、2010年3月) pp.212-16参照。なお、当該箇所の記述内容の一部について喜多見洋氏から疑問点のご指摘をいただいた。この点について謝意を表するとともに、検討の上、別の機会に私のリプライを示したい。
- 6) Bickerton, *op. cit.*, p.15.
- 7) *ibid.*, pp.23-24.
- 8) *ibid.*, p.24.
- 9) ビッカートンは、『ビブリオテーク・ブリタニク』誌制作にかかわった人々を3グループに分類している。第1に「この雑誌のオーナー編集者たち自身によって引き受けられた代表者たち (彼らは自分たちをあるときには『正規の協力者 (collaborateurs titulaire)』とか、『編集長 (rédacteurs en chef)』、『社長 (chefs de l'entreprise)』、『共同所有者 (associés propriétaires)』、あるいはたんに『所有者

(propriétaires)』と呼んでいる)、第2に「『雇われ協力者、あるいは無給協力者 (collaborateurs à gages ou bénévoles)』、『給与を支払われる協力者 (collaborateurs salariés)』、『非共同協力者 (collaborateurs non-associés)』、『助手 (auxiliaires)』、『あるいは『労働者』』等と「多様に称されている協力者 (collaborateurs)」、そして第3に「寄稿者 (contributeurs)」である (*ibid.*, p.258)。そのうえで「協力者」と「寄稿者」は異なることを強調している。

- 10) *ibid.*, pp.260-1.
- 11) 前掲拙稿 (2010)、p.219.
- 12) Bickerton, *op. cit.*, p.199. なお彼は脚注で以下の指摘をしている。「18世紀のレビュー雑誌の内容は、原本への深刻な要求を持つような今日の批判と混同してはならない。アーサー・R・D・エリオットが指摘したように (“Reviews and Magazines in the Early Years of the Nineteenth Century”, *CHEL*, XII (Cambridge, 1915), pp.140-63)、エディンバラ・レビューやクォーター・レビュー以前の時代においては、存在するすべてが『定期刊物の偽の批判であって、周知のように自分自身の本の販売を促進するために出版者によってなされ続けた』(p.141)のであった。(…)このように18世紀末のレビュー雑誌は、しばしば『抜粋』と区別できない『レビュー』が掲載された、非常に派生的な出版物であった」(*ibid.*, p.200n.)
- 13) *ibid.*, p.200.
- 14) *Bibliothèque britannique*, t.1 (1796), pp.6-7.
- 15) *ibid.*, t.7 (1798), p.iv.
- 16) *ibid.*, p.vi. ここで取り上げられている「ロンドンに居を定めた同胞」とは、エティエンヌ・デュモンであると推測される。
- 17) *ibid.*, pp.vi-vii.
- 18) Bickerton, *op., cit.* p.214.
- 19), 20) *ibid.*
- 21) Pierre Prévost, 1816, p.343-4.
- 22) 以下このパラグラフは *ibid.*, pp.346-9.
- 23) *ibid.*, p.352. この注釈の末尾に付されたイニシャル (P. P. p) は、Pierre Prévost, professeur を略記したものである。

## 参考文献

*Bibliothèque britannique ; ou Recueil Extrai des ouvrages Anglais périodique & autres, des Mémoires & Transactions des Sociétés & Académies de la Grande-Bretagne, d'Asie, d'Afrique & d'Amérique ; en deux séries, intitulées : LITTÉRATURE et SCIENCES ET ARTS, rédigé à Genève, par une société de gens lettrés. tome I, Littérature, 1796.*

*Bibliothèque britannique, tome 7<sup>e</sup>, Littérature, 1798.*

Bickerton, David, *Mark-Auguste and Charles PICTET, the Bibliothèque britannique (1796-1815) and the Dissemination of British Literature and Science on the Continent, 1986.*

Bickerton, David and Proud, Judith (ed.), *Transmission of Culture in Western Europe, 1750-1850, 1999.*

Pierre Prévost, *Conversations on Political Economy, etc. C'est-à-dire, Entretiens sur l'économie politique, dans lesquels les élémens de cette science sont exposés d'une manière familière ; par l'auteur des Conversations sur la chimie. London, in-12 de 460 pages, Bibliothèque universelle des sciences, belles-lettres, et arts, faisant suite à la Bibliothèque britannique. tome 2<sup>m</sup>e, Littérature, 1816.*

中宮光隆、「ピエール・プレヴォの生涯と業績」熊本県立大学総合管理学会『アドミニストレーション』第16巻3・4合併号、2010年3月。

——、「ピエール・プレヴォにおける道徳哲学と経済学」熊本県立大学総合管理学会『アドミニストレーション』第17巻3・4合併号、2011年3月。